

## 飯田先生の御退官によせて

上 村 洸 （物理学教室）

飯田修一先生は、本年3月停年退官されることになりました。先生は昭和22年9月東京帝国大学理学部物理学科を御卒業になり、引続き大学院生、理学部助手として茅誠司先生の下で研究を続けられました。昭和33年に理学部助教授、昭和43年には教授になられ、その後今日まで、学部学生時代から通算しますと42年の長期にわたり、理学部物理学教室で一貫して研究生活を過してられました。

私が飯田先生と近付きになったのは、私が学部3年の時、強磁性体の磁区の観察に関するミニ実験を五月祭で行うために茅研究室に弟子入りをした時でした。飯田先生は丁度助手になられた頃で大変張切っておられ、夜遅くまで磁区を実際にみるための know-how を親切に教えて頂いたことを今でもよく覚えております。その後私が米国ニュージャージー州マレーヒルにあるベル電話研究所（現在のAT&Tベル研究

所）に勤めております時に飯田先生御一家もベルに来られ、一年半程御一緒にベル研で研究をし、当時の日本の物理の研究水準をどうやって米国の水準にまであげられるかについてよく議論を致しました。

その当時、飯田先生は酸化物磁性体の研究に関心をもち、ユニークな洞察力で優れたアイデアを出されて活発に研究を進めておられました。私もコバルト・フェライトのNMRの研究で先生と御一緒に仕事をしましたが、その旺盛な好奇心とユニークなアイデアには、多少辟易する時もありましたが、大いに感銘を受けました。

飯田先生は、既成の考え方にとらわれない大変ユニークな発想をされますが、理学部教務委員長の時に、理学部のすべての講義に番号をつけ、すべての学科の午前の講義時間を10時15分に揃えた時間割を編成して、学部学生が他学科

の講義を聴講し易いように便宜をはかったことなども、ユニークさの現れと云えましょう。最近飯田研究室と一緒に討論する機会もなく研究室の様子はよく分かりませんが、嘗ての飯田研究室はさむらいも多く、談論風発の気風に溢れ、その意味で大変ユニークでありました。現在多くの飯田研出身者が物性物理の分野をはじめ広く学界で活躍しておられるのも、先生の教育熱心と飯田研のユニークな雰囲気を負っているの

ではないでしょうか。

飯田先生は現在研究以外に東大百年史の編集に理学部編集委員長として参画され、この面でも御活躍になっておられます。間もなく完成の予定と伺っていますが、大変骨の折れる仕事で本当に御苦勞様でした。停年後も御健康に注意されて御活躍下さいますようお願い申し上げます。